

## バスクの“キセキ”

- バスク地方について -

杉 山 朱 実

## はじめに

今（2021年）、日本では、バスクケーキ、バスクチーズ等、バスク地方のスイーツやグルメ等が知られるようになり、また、NHKの語学講座、スペイン語では、バスク地方のサン・セバスチャンを訪れた場面では、街中で、普通に、バスク語とスペイン語がいきりまじって会話されていた。バスク地方とは、現在、スペインとフランスのピレネー山脈を挟む7つの州からなる地域を示し、ヨーロッパでは、リゾートや美味しいグルメのある観光都市として、知られた街や地域である。フランス語講座でも、バスク地方を訪れて、有名な音楽家であり、ボレロで知られる作曲家、ラベルが生まれた都市を巡り、バスク人としてのラベルが現在では、当たり前で紹介され知られる様になった。また、スポーツでは、バスク地方独特の、ペロタと呼ばれる、スカッシュとテニスに似たスポーツがあり、その鍛錬から、当時はフランス人とされた、テニスの有名プレイヤーとして、バスク人のラコステ氏がいる。

日本へ最初に訪れたバスク人は、宣教師のフランシスコ・ザビエルである。彼は、当時、まだ存在していた、バスク地方のナバラ王国のザビエル城が残る州都の家柄で、当時は長男以下の男子の息子は、家督を継がない故に、牧師等の職に就くため、パリのカルチェ・ラタンで神学の勉強をしていた。おなじ故郷からの友人達とイエズス会を立ち上げ、東アジアへの布教へと乗り出した。現在のフィリピンで出会ったのが、日本から流れ着き、そこで生活していた漁師である。彼の機知を知り、その機知を造り上げた国、日本への興味を持ち、その国、日本への布教を決意し、現在の鹿児島・種子島に、聖母被昇天の日の8月15日に到着し、日本への初めてのキリスト教布教への道が開かれたのであった。現在では、「日本へ初めてキリスト教を布教した宣教師、バスク人のフランシスコ・ザビエル」と教科書にも書かれているが、以前は乗ってきた船の出向地から、ポルトガル人（または、スペイン人）のフランシスコ・ザビエルと書かれていた。

今、日本ではバスクケーキに始まり、バスク地方、バスク人と、公明盛大に、「バスク」と表記できる時代となった。ヨーロッパ世界でも同様である。フランス・マクロン大統領が、G7会議の場所として前回選んだのも、バスク地方のリゾート地であった。

この様に、まさに「今、花咲けるバスク地方、バスク語」には、どのようなキセキ（軌跡=奇跡）があったのであろうか。“バスク”と名乗ることさえ禁止された、悲惨な時代が、すぐ目の前にあった。バスク語は極地言語とされ、禁止された時代から、絶滅言語、死語への道を歩んでいると思われていた。この論文では、そのキセキを紐解いてみたい。

---

キーワード：ゲルニカの悲劇、バスク、バスク語

## 第一章 ゲルニカの悲劇

「ゲルニカ」と聞いて、まず思い浮かべるのは、ピカソの描いた「ゲルニカ」の絵画であろう。カタルン人であるピカソであるが、パリ万博のため、スペイン共和国から壁画の依頼を受けていたピカソは、廃墟となったゲルニカ爆撃の悲劇を知り、ギリシア神話の悲劇を基に、「ゲルニカ」を描き、世界にその悲惨さを示した。そして、「その様な祖国へは二度と戻らぬ！」と宣言し、その言葉どおり、その後の人生をフランスで過ごし、終えた。

「ゲルニカの悲劇」とは、スペインのバスク地方（ビスカイヤ州）のゲルニカの街が、スペイン内戦の長、フランコ将軍と密約した、ドイツのヒットラーとイタリアのムッソリーニの連合空爆により、1937年4月26日に破壊され、廃墟となり、無辜の民衆（特に女性や小さな子供達）が多数、犠牲者となった、「スペイン内戦」での悲劇の象徴とされる出来事であった。

なぜ「ゲルニカ」であったのか。それは、「ゲルニカ」がスペイン側・バスク地方にとって特別な場所だったからである。

ヨーロッパに位置しながら、言語的にはヨーロッパ語族に属さず、その歴史は、カエサル（シーザー）皇帝がローマ帝国を拡大していく「ガリア戦記」の中にも、既に存在し、その起源不明とされるバスク語故に、「悪魔の言語」を話す高等な文化をもった民族がいると、されたバスク語を語る人民達は、少なくとも、3000年以上前から、その地に存在し、「山バスク」と呼ばれる人々は、ピレネー山脈で、羊を中心とした牧畜をし、「海バスク」と呼ばれる人々は、大西洋（ビスケー湾）から遠洋漁業へ出向しクジラ等を捕獲し、生業をたて自立した生活を続けていた。バスク地方と呼ばれる範囲は、近世の7州（フランス側バスク：ラブル州、低ナバラ州、スール州の3州。スペイン側バスク：ナバラ王国（州）、ギプスコア州、ビスカイヤ州、アラバ州の4州。）のバスク地方より、もっと広大であったはずだが、少なくとも、1600年頃までに、今のほぼ、7州の範疇となり、議会も開かれ民主的な統治がなされていた。

バスク人は、ナバラ王国を例外として、国という形を造らなかった。各バスク領を支配する領主に、「フェロー（法）」と呼ばれる慣習法を、はじめは口頭伝承していたが、1452年には成文化され、その集会の場となったのが、ゲルニカ議会場であった。各バスク地域を支配する領主に、バスク人達は、この「フェロー（法）」を提出し、安全を確保していた。条文には、議会で納得すれば領主に税を支払うが、領主の恣意的権力から免れる条項も含まれ、戦う範囲はバスク領内のみとされた。この「フェロー（法）」の手原稿本の現物が、再建されたゲルニカ議会場の文書館に、現在保管されている。また、ゲルニカ議会場には、この地で宣誓した歴代領主の肖像画が掲げられている。1609年、メンディエッタ画伯による絵画には、ゲルニカで「フェロー（法）」の厳守する場面として、当時のビスカヤ領主フェルナンド5世が、隣国、カスティリヤ・レオン王達と、議論する場面が描かれている。この様に、古代から近代まで、民主的な方法で、生活の営みを続けてきたバスク人達にとって、ゲルニカは、その基盤を築く、大切な「ゲルニカ議会場」があったシンボリックな場所であった。

そこへの空爆を命じたのが、スペイン内戦の長、フランコ将軍であった。フランコ将軍（1929-1975）は、スペイン市民戦争を鎮圧し、軍事独裁体制をその逝去まで（1939-1975）確立した。

フランコの作戦は、1937年に始まった。まずはバスク地方の東西の分断を考えていたようだ。歴史上、最初の空爆。それがゲルニカへの集中攻撃となった。

## 第二章 バスクの苦難

1937年4月26日。この日は、ゲルニカの街に、「市場」が立つ日で、買い物をする子供連れの女性達で、街は、にぎわっていた。3時間15分にわたって、ドイツのコンドル部隊のハインケル重爆撃機を中心とした空からの波状攻撃が起きた。超低空での機銃掃射からの狙い撃ち、防空壕に入ったところをエレクトロン焼夷弾（この頃ドイツで開発された焼夷弾で地上到達の衝撃で発火し、放出温度は3000度になる。）の雨を降らし、消火は困難である。爆弾と焼夷弾が約4万キロ投下されたのであった。ゲルニカは火の海となり、女性達は、「子供が、子供が、」と叫び続けた。ゲルニカの街は、一晩中燃え続けた。この空爆という、新たな戦争の方法は、日本の行った真珠湾攻撃、アメリカの行った広島・長崎への原爆投下へと繋がっていく。

### 第一節 疎開児童

その前年、1936年10月1日、スペイン国会で、バスク自治法が成立していた。

ビスカイヤ州選出の議員、ホセ・アントニオ・アギーレが、「民主主義こそ、バスクの伝統であり、民主主義の為にファシズムが敗れ去るまで、バスクの愛国者は、その立場を守ります。」と演説し、バスクの長年の悲願であった自治法の成立に大喝采が起こっていた。直ぐに、ギブスコア州、アラバ州らの市町村の代表が、ビルバオの4か所、更に、ゲルニカの議会議場で集計を行い、291471票をもって、初代バスク自治政府大統領に、アレーギが選ばれた。彼は、ゲルニカの木の下で、就任の誓いをバスク語で、次のように述べている。

「神の御前にて、バスクの大地に立ち、祖先の思い出と共に、私の任務を忠実に果たすことをゲルニカの木の下で誓います。」この時、アレーギは32歳。早々に閣僚を決めるが、そのほとんどが、30代前半の若い政府であった。

ゲルニカ空爆での、非戦闘員に対する大量虐殺という、これまでにない戦争の形が生まれた。アレーギ（初代バスク自治政府大統領）は、ゲルニカ空爆の翌日、ヨーロッパ諸国等に、バスクの女性、子供、老人達の疎開受け入れの要請を行う。アレーギ大統領の要請に答え、各国の「スペイン共和国援助組織」が疎開児童等の具体的取り組みに取り掛かる。

ヨーロッパ各国では、ゲルニカの悲劇が大きく報道され、フランコ将軍に味方するドイツやイタリアのファシズム勢力に対して、バスク市民への同情が広がっていた。

グレゴリア・アキレンによる「1937年、バスク疎開児童」によると、フランス・22238人、イギリス・3956人、ベルギー・3201人、ソ連・2500人—5000人、メキシコ・456人、スイス・245人、デンマーク・105人等の記録が残っている。同じスペイン語圏の中南米諸国からの受け入れもあったが、アメリカ合衆国は受け入れ拒否をした。

## 第二節 カトリック教とバスク

1479年、カスティリヤ王国のイザベラ女王とアラゴン王家のフェルナンド王との両王家の合体で、スペインが成立し、以後、このスペインが権力を集中していく中で、19世紀まで、バスク、ナバラ王国が、その独自性を維持できたのは、「フェロー（法）」の存在のおかげである。

国王、領主といった、上からの支配に対して、この独自の「フェロー（法）」の尊厳により、バスクは独自性を守ることができ、この「フェロー（法）」の尊重を権力者達に認めさせたからであった。

バスク人の信仰の深さには定評があり、聖職者を尊重し、聖職者も、これまでは人民達を裏切らなかった。「フェロー（法）」により、ゲルニカ議会場＝礼拝堂であり、カトリック教会は、バスク人の生活の中に溶け込み、切り離しがたいものであった。ゲルニカの「樫の木」の下で、権力者達や領主達、国王に、「フェロー（法）」を守ることを誓わせ、バスク人の身を守り、隷属から逃れることを第一として来た。この点で、ナバラ王国は違っている。ナバラ王国は、「常に、君主政治に対して忠実であれ」とした。ほかのバスクが、しっかりとした自給自足を形成していたのに対し、フランコ将軍が反乱軍を率いた時、ナバラ王国は、積極的に支持し、1936年に共和国から認められたバスク自治政府にも加わらず、フランコ将軍死後、改めて認められた、現在の自治政府にも、加盟していない。ナバラ王国で過ごしていたカタラン生まれのゴマ司祭が、ナバラ王国の保守層を取り込み、フランコ将軍による内戦中、ここに住み、フランコ将軍の反乱を称え、ゴマ司祭が、フランコ将軍政権と、バチカンを結びつけるべく1936年12月にはローマへ赴いた。さらに、ギプスコアの自身がバスク人である、ムヒカ教区長に対し、ゴマ司祭から国外退去を何度も命ぜられ、従わなかったが、ムヒカ教区長はローマでの会議への出席を命じられた。このローマへの不在中に、ギプスコアは、フランコ将軍勢力に敗れ、占領されたことを、ムヒカ教区長はローマで知ることとなった。ナバラ王国、ギプスコア州とフランコ将軍勢力に占領される中、カトリック教を守ると言っていたフランコ将軍は、聖職者の弾圧に容赦なかった。裁判もなく、14名もの聖職者が処刑された。フランスに亡命していた聖職者たちは、その残忍な事実を「合同教書」として1937年出版する。バスク聖職者による「合同教書」は、ゴマ司祭を怒らせバスク批判への文書が出された。そして彼は、フランコ将軍の反乱勢力に対し「愛国的精神に結びつけた国民運動であり、キリスト教を擁護している」として、賛美を送った。バスクの聖職者の多くは教区民と共に、苦楽を共にしたが、その為、スペイン内戦、終結後も、フランコ将軍やゴマ司祭から、迫害を長く受け続けた。

一方、ムヒカ元教区長は、1947年に帰国し、ギプスコア州でひっそりと、隠居生活を送り、1968年、98歳で亡くなった。その葬儀には、長い列が続いたという。

## 第三節 ゲルニカの火

1970年9月18日、サン・セバスチアンのアノエタ競技場で、ペロタの国際試合が行なわれていた。その時、全身火だるまの男が、「バスクの自由万歳！」と叫びながら転び落ちてきた。その様子は、ペロタの実況放送を見ていた全スペイン人に伝わった。一命を取り留めたその男、ヨセバ・エロセギは、翌年、ボルドーで出版された本に、こう綴っている。「フランコを殺すつもりはない。私は、

象徴的な“ゲルニカの火の恐怖”をフランコの下に運び、彼に感じさせ、考えてもらいたかった。」と。「死の覚悟をもって、私の生命を価値ある行為に使いたかった。」と。この事件により、フランコ政権側にいた、情報局のリカルド・デラ・ジョウルバが、初めて、「ゲルニカの爆撃は、ドイツ軍によるものであった。」と認めたが、フランコ将軍自身は、認めず、「バスクのアカのテロリズムがやった事」とされ、フランコ将軍の軍事裁判で、E T Aの16人のメンバーが、死刑となり、もうひとつの自治省であった、バルセロナを中心とするカタルーニャ州と共に、バスク州も、独自の言語使用の禁止、自治州としての権利のはく奪を余儀なくされ、フランコ将軍の逝去まで、その禁止令が続き、特に、バスクのE T Aは、世界からテロリスト集団とみなされてしまう。エロセギは、E T Aのメンバーではなかった。54歳の彼は、一人のバスク人として、フランコ将軍への抵抗の為に、命を顧みない行動を行ったのだ。

1975年、11月にフランコ将軍は逝去する。1979年、カタルーニャ州と共にバスク州は、自治州となり、共に、その言語と文化を取り戻したのである。

エロセギは、1983年、上院議員となった。防衛委員会で訪れた、ロタ海軍基地の視察で、案内された部屋に掛けられたカルロス国王と並ぶ、フランコ将軍の肖像画を、近寄って、ひっくり返した、と言われている。エロセギは、最後までフランコ将軍に抵抗したバスク人であった。

### 第三章 今花咲けるバスク語の復活

1989年9月、私はスペインのサン・セバスチャンで行われた、「世界バスク語学会議」に参加していた。紹介してくれたのは、フランスの著名な言語学者、恩師のアンドレ・マルティネ先生である。

日本の大学院で言語学を学んでいた私は、アンドレ・マルティネ先生の、ある論文を読み、疑問点が浮かんだ。マルティネ先生へ直接手紙を書き、是非、先生のもとで勉強をしたい旨を伝えると、直ぐに、折り返しのお返事のお手紙を頂いた。遠い日本からの、見ず知らずの“一大学院生”に、「日本からの未来の言語学者に、フランスでお会いできるのを心より楽しみにしています！」と。遠い日本からの、見ず知らずの“一大学院生”の想いに、誠実に答えてくれたのであった。私はフランス留学準備へと取り掛かり、この年から、フランスでの大学院生活が始まった。サン・セバスチャンでお会いした、マルティネ先生は、奥様共々本当にお優しくかった。最初から、フランス語の“COLLEAGUE”（同僚）という単語を使ってくださり、「日本から来たわれわれの同僚」と呼んでくださり、著名な先生方を紹介して下さった。その中で、「屈折言語を使っている我々には、難しく、見えない難解な視点が、同じ膠着言語の日本語を使う、アケミの視点からは、我々が難解とするバスク語の機能分析をして、解決できるかもしれない。」と、研究テーマも示唆してくださり、さらに、マルティネ先生の“COLLEAGUE”（同僚）で、バスク語研究の第一人者である、ジャック・アリエール先生をご紹介いただき、私の大学院の指導教官になっていただいた。アリエール先生は、フランスで当時、唯一のバスク語講座を大学院の講義でお教えになり、また、毎週末、バイヨンヌへ通い、当時、始められたばかりの、バスク州における「バスク語学習」を現地で指導していた。大学院の講義には、バイヨンヌから毎週、アリエール先生の講義を聞きに通っているバスク人の女子学生がおり、日本からきてバスク語を学んでいる私に、講義のあと、いつもノートを貸してくれ、復習に

つきあってくれたり、バスク語の辞書をバイヨンスから買ってきてくれたり、試験の寒い冬空の朝も、早くから、呼びに来てくれたりと本当にやさしく接してくれた。勿論、マルティネ先生は、パリから、いつも、論文が出るたびに、その抜き刷りを毎回、送ってくださり、必ず、ユーモアの一言が、添えられてあった。フランスの大学院で学ぶ間、常に、言語学視点からのマルティネ先生からのご教授、直接の指導教官としてバスク語の講義・論文指導を頂いたアリエール先生、講義のあと毎回、復習に手助けしてくれたバイヨンスから通っているバスク人の女子学生と、心暖かな人達に囲まれ、実り多き私のバスク語研究が重ねられていった。

この時期から、アリエール先生が、7州のバスク語を、共通の一つのバスク語に編纂しその教えに、毎週末、バスク州へ足を運んでいたのである。また、大学院の講義の復習を手伝ってくれていたバスク人の女子学生は、大学院修了後は、現地のバスク州で始まったバスク語学習の先生になるといっていた。マルティネ先生、アリエール先生、彼女たちのバスク語回復の熱意と行動が、今、花咲けるバスク語となり、蕾から開花させたのであった。

## おわりに

バスク人とは「バスク語を話す人」の意味からきている。バスク語を話せれば、誰でも、「新・バスク人」として、受け入れてもらえる。その基礎を築いたのが、アリエール先生をはじめとした言語学者であり、彼女のように、地道に大学院に通い、アリエール先生の基でバスク語の理論を知ってから、現地でのバスク語学習に、直に、教授してきた人たちの賜物が、2000年代に入り、浸透し、花開いていったのである。バスク州は観光都市となり、本来の平和な街の姿を取り戻しただけでなく、観光・グルメの街として、世界から注目を集めるまでになった。

1989年のサン・セバスチャンは、まだ、フランコ將軍下の影響か残り、まるで、ユトリロが描いた絵画の様に、100年位タイム・スリップした様な、町の様子であった。黒ずんだ建物、日傘をさし、足元までの長い黒っぽいドレスを着たご婦人方が、公園でゆったりと過ごしていた。郵便事情の回復が遅く、学会で買った本をフランスの自宅で受け取るまでに、2か月もかかった。バスクの復興までには、もう少しの時間が必要であった。対照的なのは、バルセロナのあるカタラン州であった。バルセロナでは、直ぐに、オリンピックが誘致され、友人と訪れた、サクラダファミリア教会の近くでは、ポシャツを着て、忙しく働く若者が、立ちテーブルに、コカ・コーラとホットドックを運んでくれた。まるで、NYの様である。1989年のスペインでは、一方で、バルセロナに代表される、オリンピックに向けて、アメリカ風に急ピッチで進んでいくカタラン自治州と、100年前にタイム・スリップしたかのように古さを残すバスク自治州が、同じ国に、対局として、混在していた。

2021年の今、カタラン自治州は、独立を目指し過激となり、逆に、バスク自治州は、フランス・バスク、スペイン・バスク共に、バスク地方として、世界からの、観光・グルメの平和な街として、今、辛い軌跡が奇跡となり、バスク人本来の平和な営みを続けている。

今、花咲けるバスクに、幸、永遠にあらんことを心から祈っている。



1989年，世界学者バスク語会議にて  
(スペイン，サン・セバスチャン)